

古琉球の世界



比嘉実

古琉球の世界

Printed in Japan

比嘉実

一九八二年四月二十八日 第一版第一刷発行

一九四三年 沖縄県浦添市に生れる。
一九六九年 琉球大学文学部国語国文学科卒業。
一九七三年 法政大学大学院人文科学研究科日本文学科修了。
一九七二年 法政大学沖縄文化研究所助手となる。
現在、法政大学沖縄文化研究所専任所員、助教授。

現住所 東京都町田市木町田二三八一七
電話 自宅 〇四二七―二二一五六三三

著者 比嘉実

©一九八二年

発行者 菊地喜三次

発行所 株式会社 三一書房

東京都千代田区神田駿河台二の九
電話 〇三(二九一)三二三一
振替 東京 九一八四一六〇番

郵便番号 一〇一

印刷所 岩村田活版所
製本所 東京美術紙工

落丁・乱丁本はおとりかえいたしません

古琉球の世界――目次

第一章 古琉球の思想

中国文化の琉球への伝播……………七

——おなり神と媽祖〈天妃〉を中心に——

崇りなすものの南島の形象……………七

——鱸伝説にみる南島の思想——

おもろにみる古琉球の思想……………七

——「添い」世界内部への指向——

花風前史……………九

——視覚の呪術的意味の変遷——

第二章 南島歌謡

沖縄歌謡概説……………一〇三

おもろの読解法について……………一〇六

——分離読法の問題点——

地方おもろ成立の周辺……………一一二

——地方おもろと文字の出逢い——

琉歌の源流とその成立	一九
南島の抒情歌について	二四
——伝承歌謡としての琉歌の考え方を中心に——	
おもろ歌人の群像	三三
——ミニ宮廷歌人と漂泊の歌人たち——	
第三章 琉球演劇史	
朝薫と朝敏の時代	四七
——十八世紀琉球文学の動向——	
組踊の成立と躍奉行について	六六
明治沖縄演劇小史	七六
初出誌一覧	八六
あとがき	九六

第一章

古琉球の思想

中国文化の琉球への伝播

——おなり神と媽祖（天妃）を中心に——

はじめに

湧泉寺のある鼓山の峠から一望すると、福州市の左手には閩江が支流をいくつも形成しながら蛇行しつつつたりと流れている。福州市の中心街を通り抜け閩江にかかる解放大橋（旧大万寿橋）を渡るとそこは南台である。閩江から二キロほどの距離、龍眼の樹におおわれた小高い丘の南斜面に琉球人墓地はある。住宅や工場が墓地のすぐ近くまで接近し、目を凝らさなければ解らないほど雑草が茂っている。その地を訪れたのは五月の初旬、すでに日中の温度は三十度を越えていた。イチュビ（野いちご）の赤い実がところどころ顔をのぞかせている。多くの墓碑は土に埋れ、判読がでさるのとはわずかに十たらずであった。昭和初期にこの地を訪れた東恩納寛惇によればこの地に眠る琉球人の総数は六百名を下らない。福州の地を踏むことなく東支那海の藻屑となった人々を加えると進貢使路や対中貿易の旅で死亡した人々の総数は数知れない。

首里儀保村の真境名子も福州で病を得て倒れた者のひとりである。道光十三年（一八三三）九月十三日医学を学ぶため那覇港を出発、多分親戚朋友に送られての唐への旅立ちであった。唐名を得庭筠と称する二十七歳のこの青年は同月二十二日無事福州の柔遠駅（琉球館）に到着、その後、王騰芳という医師に師事して医学を学んでいる。しかし、翌年九月七日には突然病を患い異国の地で短い生涯をとじている。那覇港を出帆してから一年足らずのことである。得庭筠

の中国への旅はまさに沖縄で言うところの唐旅へあの世への旅立ちの意そのものであった。中国への旅は死を賭しての旅であった。

明の開祖洪武帝の招撫に琉球側が応じ、中山王察度が泰期を使節団の長として派遣し、以後、琉球処分によって琉球が日本国に属することになるまでの五百年間、実に数多くの人々が琉球から東支那海を越えて福建省の福州、泉州に渡っている。高良倉吉氏のおおよその試算によればこの間に中国に渡った人々の総数は二十万を下らないとも言われている。人々は、帆船による航海であったから進貢使としての儀礼を終え、品物の売買、交換が済んだからといってすぐに帰国の途につくわけにはいかない。冊封使録の航海日誌を見ると白南風しろなまの吹く五、六月頃福州から出航し、回閩は新北風せいほふの吹きはじめる九月末から十一月頃にかけての時期であった。琉球側から見れば九月末から五、六月まで福州に滞在したことになる。半年以上の長い滞在であった。なかには学問、医学、工芸技術修得のため長期間中国に滞留する人々も少なくなかったはずである。二十万のうち得庭筠のように異国の地で倒れた者、台風、海難に遭遇して海の藻屑となった者も少なくなかったが、大部分の人は東支那海の荒い波濤を越えて再び故国琉球に無事に帰ってきた。

進貢貿易は政治的服属儀礼に付随する貿易活動であったが、先進国中国における琉球人の長期間の滞在は、貿易による物質的利益以上のものを琉球に将来する契機となった。現在、琉球の文化としてもはやされるもののなかに、福建あたりにその源を発するものが少なくないように思える。特に琉球の古代国家の揺籃期において南中国福建省あたりの文化は決定的な影響を与えた。閩人三十六姓の琉球への移住はその最たるものである。死を賭して東支那海の波濤を越えたのは、ある者にとって「唐一倍」といわれる中国貿易による富への指向であった。又、ある者にとって立身出世を前提にした学問の修得であったり、国への忠誠心であったり、実にさまざまな心情が人々にはあったはずである。しかし、長期間にわたる中国との交渉の歴史は、前記のような個々の人々の心情をこえて実に多様な学問、文化を琉球にもたらした。人口比から考えて二十万人以上の人々がかつて中国に渡ったということは、中琉の文化的交流が現在の人々が考える以上のものであったことを予想させる。昭和五十六年五月「進貢使路の旅」の一員として福州を訪れた際、短期間ながらその地で見聞したことがらはまぎれもなく琉球の文化と同系のものがそこに存在するという実感であった。そのこ

とは特に料理や美術工芸品、民俗的事物などに顕著にあらわれていた。⁽⁵⁾そこで思ったことは沖縄の根生いのものと考えられているものの中に、案外、長い海外交渉史のなかで琉球に将来されたものがあるのではないか、という疑問であった。このような視点に立って『おもろさうし』の船歌を収録した第十三巻を見ると、航海の守護を謡ったおもろのなかに天妃の霊蹟の影響ではないか、と思われるものが少なからず見られるのである。

根生いであれ外来のものであれ、島の生理は根生いのままにそれを育むことも、外来の思想をそのままに受容することもなかったように見える。長い海外交渉の歴史的過程において根生いのものは島の岸辺を洗う外来の思想と、外来の思想は根生いのものと習合することによってより強く琉球の島々に定着し得たようである。

一 おもろに見る航海守護の霊蹟

『おもろさうし』に収録されたおもろは琉球諸島における政治的社会的揺籃期から薩摩の琉球入り前後までの長期間にわたって謡われ、作られたものである。船歌が「船ゑとのおもろ御さうし」として第十三にまとめられたのは琉球が島嶼から形成されるという風土的条件に因ることは勿論であるが、それ以上に、おもろを担う集団が交易によってその経済的基盤を確立していたという歴史的条件をより強く反映している。⁽⁶⁾民間に伝承されるウミイが同じ風土的条件にありながら農作物の豊穰祈願の内容を主に謡うことと対照的である。その相違はそれぞれの歌謡を担う集団の歴史的、政治的性格とその集団を維持するための経済的性質の差異に他ならない。『指南広義』はおもろ時代より後の著書で航海の安全のため欠くことのできない天気象に関する書であるが、おもろ時代の航海もその時代の科学的知識に基づいて航海されたであろう。いたずらに魔術的なものに頼ることはなかったはずである。しかしながら、当時の航海は現在に比べて予知不可能な自然条件に左右されることが多く、魔術的なものに依存する心情をより強く指向させたに違いない。ウミイに農作物の豊穰予祝の歌謡が多いのも同様な思考であろう。

明の太祖洪武帝の招撫を発端とする琉球の海外交渉は、倭寇の跳梁を防ぐ中国の海禁政策を背景に、中国、東南アジ

ア、日本を結ぶ中継貿易として飛躍的な発展をとげた。しかし、ヨーロッパ列強の東漸や日本の堺商人の活躍によって、十六世紀末中継貿易としての実質的役割を終える。琉球の歴史のなかにあつて「琉球の時代」とよばれる栄光のこの時代は文化史的・文学史的時代区分によればまさにおもろ時代と重なる。⁷⁾

察度から第二尚氏にいたる各王朝は中国王朝の權威の利用によって政治的に国内的權威づけを行なつた。そして政治的関係を契機に生じた対中貿易、その發展として東南アジアと日本を結ぶ中継貿易の隆盛は、各王朝に莫大な利益をもたらしたと考えられる。しかし、帆船を利用して行なわれる航海は常に死となりあわせの危険を伴つた。「唐旅」という言葉の意味は東支那海を帆船で渡ることがこのうえなく困難であつたことをよく示している。

帆船による航海が人力ではあがないようのない自然の力によって左右される場合が多かつたゆえに、おもろのような呪術的な船歌を歌うことによつておもろ人は神への祈願をなし守護を托したのである。『おもろさうし』に最も数多く船歌が収録されたのは、多分、おもろの時代がおもろを担う階層、集団によつて危険の伴う海外貿易が行なわれていたことと密接に関連する筈である。それはおもろに托した呪術によつて科学的知識だけでは抗しようもない自然を心情的に克服し、安全を招来しようとする行為であつたと考えられる。

実際にどのようなかたちでおもろ人が航海の守護を幻想したのか、第十三「船多とのおもろ御さうし」で見てもよい。

すゝなりがふなやれの節⁽⁸⁾

965 一吾がおなり御神の

守らてゝ おわちやむ

やれ ぬけ

又弟おなり御神の

又綾蝶^{あやはる}成りよわちへ

又奇せ蝶^{はくせ}成りよわちへ

訳

姉妹神が我を守護せんとていませり、美しき蝶に変身して、奇しき蝶に変身して、エンヤラヤー、エンヤラヤー。

南島には古来姉妹の生御魂が男兄弟を守護するという姉妹神の思想がある。⁽⁹⁾ 危険の多い航海にでかける男達は出発に際して姉妹の頭髮や手巾を姉妹から貰い受けた。姉妹の持つ霊力によって危険の多い船旅を守護して貰うためであった。又、前記のおもろのように、海洋を航行する男達は、船の帆柱をめぐって飛翔する蝶の姿を姉妹神の化身として想像していた。同様な考え方は姉妹神を謡った琉歌にも見られる。「船の高艫に白鳥が居ちよん白鳥やあらぬ御姉妹御霊」へ船の艫先に白鳥がとまっている、いやあれば白鳥ではない姉妹神の生御魂だ、の意。ある動物学者によれば蝶の飛翔能力は高く、大海を飛んでいるのをよく見かけるといふ。航海の途中、鷗のように海辺に棲息する鳥類や蝶が帆柱を回りながら飛びかう光景はよく見られることであるらしい。白鳥や蝶が帆柱をめぐって飛翔し、あるいは艫先に止まっている姿に姉妹神の変身した姿を幻想したのは、船人が日常的によく見かける光景と無縁ではなかったと思われる。陸地や島が近ければそれだけ数多く帆柱をめぐる白鳥や蝶の姿が見られたであろう。鳥影をたどりながらなされた航海にあって、白鳥や蝶の飛翔する姿は船人になにがしかの安心感を与えたであろうし、それ故に、姉妹神の化身として航海の守護神と結びつく想像力を形象しえたのではないのか、と思われる。しかしながら、姉妹神信仰が南島の風土のなかで蝶、白鳥と航海の守護神を結びつける想像力を育んだとは思えない。南島の古層文化を多く残存させている先島地方において、蝶や白鳥を姉妹神の化身と考える歌謡が沖縄地方から流入したと思われる歌謡以外に存在しないことはその点で注目される。おもろに現われた航海守護の例を次々に見ていくことにする。

はつにしやが節
893 一 東方の角の魚
向かて 飛ぶ 角わ魚

守る神まもるかみならめ

真強まぢよくあれ 見守みまもら

又てだが穴あなの角かくの魚うい

訳

東方の聖なる海に棲む角の魚よ、船に向かって飛びくる角の魚は航海守護の神の化身だ。『心を強く持ちなさい、見守ってやるから』。

航海の守護神が魚に変身して顯れるのは寡聞にしてこの神歌以外に見たことがない。おもろでは確かこの一首だけである。角の魚がどのような種類かもわからない。「向かて飛ぶ」という表現から飛び魚と解釈されているが、用例がこの歌以外になく実体は不明だといってよい。亀が報恩として航海を見守るといふ歌は先島地方に数多く分布するが、飛び魚による守護の例はない。説話では蔡讓や首里の大里親方などが亀鱉に救われた話を数多く伝えている。そのような説話群で人間を救助する魚はほとんどが鱈である。鱈と角の魚が同義かどうかは全く不明。『おもろさうし』に収録された現存のおもろがかつて存在した「おもろ」全体からみれば断片的なものでしかないという認識に立てば、魚に変身する航海守護神のおもろが、たとえ一首であれ、無視することは許されない筈である。次の例をみてみよう。

はつにしやがふし

828 一あかるいの、大ぬし

きこへ、くに、せりきうと、

やく(u)の、やくせ、ほてらちへ、

てり、おそいか、みもん

又てたか、あなの、大ぬし

又いろの、またま、へにと
 又いろの、わか、さかいと
 又いきや、よわる、ところ
 又おも、よわる、ところ

未詳語が多く歌謡を詳細に解釈することは困難をきわめる。第十三に収録されていることを考えれば船ゑとであることは間違いない。「やくの、やくせ、ほてらちへ」の(1)について校本にはつぎのような頭注がある。「十三—二三五『やの、やくせ』とある。尚本、仲本ともに『やく』か『やゝ』か判読しにくい。ここでは思想大系本に従って『やく』を『やゝ』の誤写と考えることにする。おもろの句読点が時として意味的な区切りでなく、謡い方の息継ぎに関係するものであることはすでに指摘されている。このおもろの場合にも句読点が解釈上重要な意味を持つ。私はこの部分を「やゝのやくせほ てらちへ」と考えたい。「やゝのやほう」へ十一—四二、十三—九三があるから、もうひとつの美称辞「くせ」が加えられた形で「やゝのやくせ帆」へ美しく奇しき帆の意があっても不思議ではない。このように考えると「やゝのやくせほ てらちへ／照り添いが みもん」は、「帆柱にかかった美しい帆を照らして、照り輝いて守護している神へ神女へのお姿の見事なことよ」と解釈できよう。帆を照らすことによって航海を守護する行為が神の行為、神の機能として顕現しているのをそこに見ることができよう。又、神は航海する船を守護する時に独特な衣裳を身に纏って現われるのを常とした。荒い浪を制御したり、波風の荒れるのを鎮める時に、神は「青しよ御衣」を召し、ある時は「風直り」とよばれる驚の羽を頭髮に挿して「赤の御衣」を風に翻して来臨した。十三—八四八、八五三番のおもろを見てみよう。

あけしのがこばもりが節
 848 一聞ゑあ「け」しのが

訳

青^{あお}しよ御衣^{みそ} 召^めしよわちへ
 波^{なみ}が花^{はな} 添^そよわ
 又^{また}鳴^な響^とむあけしのが

名高いあけしのの神女〈神〉が青い御衣をお召しになって御来臨くださいました。神女様よ、砕け散る波の荒さを鎮めてください。

853 一せぢ新神泊^{あらかみとまり}

雲子^{くもこ}寄せ泊^{とまり}

波風^{なみかぜ} 和^{なご}やけて

斎場^{まや}嶽^{たけ} 君々^{きみぐ}しよ 守^{まも}れ

又^{また}朝風^{あさど}れが し居^ゐれば

精遣^{せいや}り富^{とみ} 押^おし浮^うけて

波風^{なみかぜ} 和^{なご}やけて

安須^{あす}杜^{もり}の君々^{きみぐ}しよ 守^{まも}れ

又^{また}夕風^{ゆふど}れが し居^ゐれば

栄^えい富^{とみ} 押^おし浮^うけて

波風^{なみかぜ} 和^{なご}やけて

せらちよんの君々^{きみぐ}しよ 守^{まも}れ

又^{また}海直^{うみなお}し 立^たてわちへ

波添^{なみそ}いは 押^おしかけ